

聖書:ルカの福音書2章21~40節

説教:あなたの御救いを見た

はじめに

今年最後の礼拝となりました。いつもなら楽しくこの一年を振り返るはずなのに、今年はずらかったことばかりで、新しい年を迎えるという気にもなれない。そんな方も多いのではないのでしょうか。

今日からしばらくルカの福音書を見ていきます。二千年前、イエスはマリアを通してイスラエルに人となって来られました。そのイスラエルは、かつて神がアブラハムに「この地をあなたとあなたの子孫に与える」と語ってくださった約束の地でした。ヨシュアの時代、エジプトからのがれて来た人々はそこへ足を踏み入れました。そのとき民たちはこう誓ったのです。「私たちは主に仕えます。」(レビ記24章21節)

それからおよそ千四百年経ち、救い主が来られたときイスラエルはどうなっていたか。あのとき先祖たちが誓ったように、彼らの子孫は忠実に主に仕えていたか。そうではない。政治家たちは賄賂を取って正義をねじ曲げ、祭司長たちは自分たちに都合のよいようにみことばをねじ曲げて民たちを指導し、貧しい者たちを苦しめていました。加えてローマ帝国の支配下にあつて屈辱的な立場に置かれていました。ヨシュアの時代の人たちがいたなら、どうしてこんなことになったのか。どこを見ても真っ暗闇、希望がない。そんなふうに見えたでしょう。そんなときイエスが幼子となって来られました。イエスは何をしてくださったのかを見まわります。

1 律法

39節を読みます。「両親は、主の律法にしたがつてすべてのことを成し遂げたので(ガリラヤの自分たちの町ナザレに帰って行った)。「主の律法にしたがつて」とあることに注意してください。幼子イエスは律法にしたがつた。これは今日のポイントです。

でもこう言いますと、疑問に思う方もいるはずです。「このときイエスは赤ちゃんですよ。イエスではなくて、両親が律法にしたがつたのです。」確かにそのとおりです。しかしイエスはたとえ人の腕に抱かれる赤ちゃんでも、この世界を御支配している神のひとり子に変わりありません。律法を守っているのは両親ですが、イエスも一緒に律法にし

たがつておられると考えることができます。なぜイエスは律法にしたがつたのか。

いやその前にもっと根本的な疑問ですが、なぜ律法が与えられているのでしょうか。律法にはどんな意味があるのでしょうか。「律法というのは、神の命令だから、何の疑問も持たずにただしたがえ」ということでしょうか。でも、そのように唱えて民を指導したのが律法学者たちや祭司長たちはイエスに厳しく非難されたではありませんか。彼らは、律法の本当の意味を理解せず、目に見える所ばかりを見て守る守らないと議論していた。大切なのは目に見える所ではなく、見えないところ、霊的な意味を見ることだとイエスは教えられました。ではイエスがしたがわれた律法それは三つありますが、そこにはどんな意味があったのか。その一つ一つを見ていきましょう。

2 イエスがしたがわれた律法

1) 割礼を施す(創世記17章)

まず一つ目。21, 22節。「八日が満ちて幼子に割礼を施す日となり、幼子の名はイエスとつけられた。胎内に宿る前に御使いがつけた名である。そして、モーセの律法による彼らのきよめの期間が満ちたとき、両親は幼子をエルサレムに連れて行った。」

創世記17章でアブラハムは、神からカナンの地を永遠の所有として与えるとの契約を与えられたとき、契約のしるしとして男子はみな割礼を受けるようにと命じられました。イエスもその律法にしたがつて割礼を受けられます。その意味については後で三つまとめて考えます。

2) 幼子を主に献げる(出エジプト記13章)

二つ目。23節。「それは、主の律法に「最初に胎を開く男子はみな、主のために聖別された者と呼ばれる」と書いてあるとおり、幼子を主に献げるためであった。」これについては、出エジプト記13章14, 15節に説明があります。「主が力強い御手によって、私たちを奴隷の家、エジプトから導き出された。ファラオが頑なになって、私たちを解放しなかったとき、主はエジプトの地の長子をみな、人の長子から家畜の初子に至るまで殺された。それゆえ私は、最初に胎を開く雄をみな、いけにえとして主に献げ、私の子どもたちの長子をみな贖うのだ。」

「贖う」とは買い戻すという意味です。民数記にはその値として銀五シケル（今の価値で五千円ほど）を献げるようにと記されています。

3) いけにえを献げる

三つ目は24節です。「また、主の律法に『山鳩一つがい、あるいは家鳩のひな二羽』と言われていたことにしたがって、いけにえを献げるためであった。』」そのことについてはレビ記12章7,8節にある。「祭司はこれを主の前に献げ、彼女のために宥めを行い、彼女はその出血の汚れからきよくなる。これが、男の子であれ女の子であれ、子を産む女についてのおしえである。しかし、もし彼女に羊を買う余裕がなければ、二羽の山鳩か、二羽の家鳩のひなを取り、一羽は全焼のささげ物、もう一羽は罪のきよめのささげ物とする。祭司は彼女のために宥めを行い、彼女はきよくなる。」

出産の出血によって汚れている女性は、きよくなるためにこのようにしなければなりませんでした。今の時代、こんなことを言うと議論が巻き起こりそうですが、人が罪からきよめられるためにはいけにえが必要であるところにポイントがあります。

4) 律法の意味

イエスがしたがわれた三つの律法を見ました。次にそれらの意味を確認します。

そこでもう一度、割礼の話に戻ります。救いの計画と割礼が結びついています。でもご存じのとおりイスラエルは罪を繰り返す、契約に違反していきまします。本来なら契約違反ですから、契約はなかったことになり、割礼をしても何の意味もなくなるはず。でもイエスが割礼を受けられました。ということは、契約はなお有効だということになる。人が罪を犯しても、救いの計画はまったく変わらない。そのことを示すために神ご自身が割礼を受けられた。そういうことになる。

では、救いの計画はどのようにして進められるのか。イエスは、二つ目と三つ目の律法にそのことが示されているのだと教えます。二つ目の律法は、長子は主のものであるという原理でした。三つ目の律法は、罪からきよめられるためにはいけにえを要求するという原理でした。この二つの原理をまとめるならどうなるか。人が完全に罪からきよめられるためには、長子である方が父なる神の前にいけにえとなって献げられなければならない。それが律法が要求していることです。

でもこのとき、だれも律法のイエスがどう関わっているのか、わかっていない。次に登場するシメオンの口によって、初めて明らかにされていきます。

2 シメオンとアンナ

1) あなたの御救いを見た

「イスラエルが慰められるのを待ち望んでいた」シメオンは、幼子イエスを腕に抱き、次のように告白します。29～32節。「主よ。今こそあなたは、おことばどおり、しもべを安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの御救いを見たからです。あなたが万民の前に備えられた救いを。異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの栄光を。」

イエスが三つの律法にしたがわれた時、シメオンはここに神の御救いがあることを人々に告げる。そこまではよい。続いてシメオンは神の救いがどのようなものであるのかをマリアに告げます。34節。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れたり立ち上がったたりするために定められ、また、人々の反対にあうしるしとして定められています。あなた自身の心さえも、剣が刺し貫くこととなります。それは多くの人の心のうちの思いが、あらわになるためです。」

私たちはこれが何を意味するのかを知っています。みことばを語り、悪霊を追い出し病気や、障がいを持つ者とをいやすイエスを見て、人々はイエスに大きな期待を寄せ、もてはやしていたのに、ローマ軍に逮捕されるやいなやすぐに手のひらを返すようにして「十字架につけろ」と叫び、イエスを十字架に追いやっていった。その一部始終を母マリアはやがて見ることになるのです。

イスラエルが慰められるためには、神のひとり子が十字架でいのちを捨てなければならない。それが「イスラエルの多くの人が倒れる」という表現になります。でもイエスは三日の後によみがえらることによって、完全にイスラエルは慰められることも見えています。それが「立ち上がったたりする」という表現になります。私たちの真の慰めは、十字架の死と復活によってもたらされる。シメオンは幼子イエスを抱きながら語ります。

2) エルサレムの贖い

シメオンに続いて登場するのはアンナという女預言者です。38節。「ちょうどそのとき彼女も近寄って来て、神に感謝をささげ、エルサレムの贖い

を待ち望んでいたすべての人に、この幼子のことを語った。」

アンナは、エルサレムの贖いを待ち望んでいた人々に、イエスを紹介します。イエスが三つの律法にしたがわれたことによって、今何が明らかになったか。シメオンによってイスラエルの慰めが明らかになった。アンナによってエルサレムの贖いが明らかになりました。

3 キリストは慰めと贖いを示す

ある方は、律法のみことばを読み、律法を守らなければ救われない信じて、一生懸命努力なさろうとします。また一方では、律法に違反しているので自分は天国には入れない、救われていないと嘆く方もいます。どちらも本人には平安はありませんからつらいことです。いったいどうしたらよいのか、多くの方が悩みます。

そもそも律法は、今日見ておわかりのとおり、神のひとり子が十字架に向かうことを求めているのです。私たちはどんなに逆立ちしても守れるはずがない。この方にとって律法を守るとは、十字架におつきになる、それしかない。律法は私たちを苦しめるためであったのではなく、罪に苦しむ私地が慰められる、贖われていく希望として与えられていたのです。どうせできっこないのだと開き直るのではなく、がんばればできるはずだとごまかすのではなく、律法を守れないことを悲しみながら、それでも私たちには希望があります。

二千年前、闇がますます深まるかのような時代にイエスは来られ、幼子のときから救いの道、十字架の道、茨の道を歩み出します。であるならば、この暗闇の時代にあっても私たちには希望があるということになる。

私たちはこの方を希望の光として新しい一年を歩んでいきたいと願います。